

ギリシャ・クレタ島に息づく サステイナブル・ツーリズムの精神 —エコ&アグリツーリズム施設 「ミリア・マウンテン・リトリート」を事例として—

石 本 東 生

はじめに

本稿は、ギリシャ・クレタ島における代表的なエコ&アグリツーリズム施設『ミリア・マウンテン・リトリート (Milia Mountain Retreat)』に関する調査報告である。

同施設は『ナショナルジオグラフィック』誌の公式ウェブサイトにて、「世界の『エコロッジ (Eco-Lodge)』 トップ10」¹⁾にもランキングされているほどの知名度。事実、ギリシャにおいてもアグリツーリズムのパイオニアと評される場所であり、季節を問わず常に予約が困難な、欧州でも知る人ぞ知るアグリツーリズム施設である。

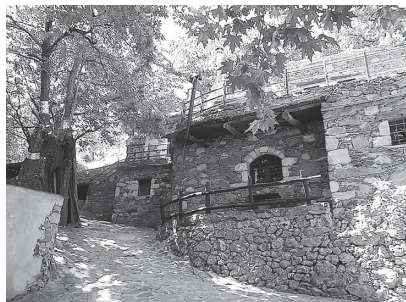


写真1 ミリア・マウンテン・リトリートのテッジのひとつ

しかし、残念ながら日本人観光客、日本の旅行会社にはまったくと言って良いほど知られてはおらず、ましてやその極東の国からは誰も訪れることのないクレタ島山奥のこの施設を、筆者は調査のため13人の専門ゼミ学生たちと共に2014年9月に訪問し、3日間滞在した。その間、幸いにも設立者兼オーナーのイオルゴス・マクラキス氏に対するヒアリング調査の機会を得た。その時の録音データを今回原稿として起こし、本報告とした次第である。なぜなら、そこには注目すべき「アグリツーリズム起業家」の気高い精神が脈

調査報告

打っており、「サステイナブル・ツーリズム」の観点からも非常に重要な内容であると判断したからである。

尚、本ヒアリング調査はギリシャ語によって行われ、そのデータを筆者が日本語に翻訳した。よって、文責は筆者本人にあることを予めお断りしておきたい。(本稿掲載の写真も、すべて筆者が撮影)

(以下、ミリア・マウンテン・リトリートの設立者兼オーナー、イオルゴス・マクラキス氏 [Mr.Giorgos Makrakis] へのインタビュー内容)

Giorgos Makrakis

1. 幼少の頃の私とミリア

ミリアにおける私たちの父祖の歴史はこの文書の中に書かれています。(ミリアのパンフレットを開きつつ……) ただこの (インタビューの) 場では、私自身が見て、触れて、覚えている限りのミリアの歴史を語りたいと思います。

私が幼少の頃、このミリアの集落に車でアクセスする道路など全くありませんでした。当時、私の家族はこの地域にかなりの規模で土地や畑、そして家を持っていました。例えばオリーブ畑、栗、また様々な種類の果樹園を有していたのです。果樹園では特に洋ナシをたくさん作っていました。

私が幼少の頃、家族は既に麓の「ザラトス」という村に生活していましたが、私が8歳頃の時期から両親、兄弟と一緒にこの地によく来ておりました。当時は当然毎回徒歩、あるいは荷物



写真2 ミリア・マウンテン・リトリートの一部。左はレストラン、レセプション棟。右はコテージ群

運搬用のためロバを連れておりましたので、ロバに乗ることもありました。1時間ほどの距離でしたが、オリーブをはじめ様々な作物を収穫するために来ていたのです。栗の時期は栗を、オリーブの時期はオリーブを…、といった感じです。すなわち、朝早くヴラトス村を出て、ここミリアで夕方まで収穫をし、そしてまたヴラトスに帰っていきました。たくさんの収穫物がありましたので、帰りはロバに収穫物を載せるだけでなく、子供の私たちまで様々背負って歩いたものです。それも1回の往復では間に合わずに2回、3回と行き来することもありました。それらの収穫物を販売して、家族は生計を立てていました。当時はそれ以外には収入源がなかったのです。

とりわけ「栗」は高価格で良い収入源でした。その需要も多かったのです。当時、近隣の村々の農家は、殆どが「栗」で生活できていたと言っても過言ではありません。しかし、それ以外の収入源というと、野生動物を狩猟し、食肉として売るぐらいで、実にこの地域は「生産性の低い未開の地」でした。さらに、元来、野草やハーブが多く存在していたところではありましたが、山火事や野生動物による乱食が原因となり、殆ど「禿山」状態でした。

そのため、この地域の野山を豊かな植生に戻すために、麓の村からたくさんの野草やハーブの苗や種を持参して植えることも度々でした。その後1982年から、ミリアでアグリツーリズム、エコツーリズムを始めようというアイデアが生まれましたが、当時は誰も「アグリツーリズム、エコツーリズムとは何か？」など知るよしもなかったのです。



写真3 ホワイトマウンテン連山の山懐に抱かれる「ミリア」

2. ミリア・マウンテン・リトリートの創設期

さて、私たちの父親の世代で、ミリアの地主の一人にヤコボス・ツルナキスという男性がおりました。彼はドイツに留学し、ドイツ語やドイツ文学を

調査報告

修め、高い教養を身に付けた人でした。そして留学後ハニア²に戻ってきたヤコボスは、教師となりドイツ語を教えていました。その一方で、彼はドイツでは既に産声を挙げていたアグリツーリズム、エコツーリズムに注目し、そこでそれらの知識を吸収していました。その背景には、彼が生まれ育ったミリアの地で、同様なことができないかどうかを模索していたに違いありません。なぜなら彼は本当にこの地を愛していたからです。

そのような経緯から、1982年よりこの地でアグリツーリズム、エコツーリズムの拠点を作るための努力が始まりました。残念ながらヤコボスはハニアにて教員をしていましたから、常時ミリアに居住するというわけにはいきませんでした。一方で、私自身は当時既に18歳になっており、かなりの重労働にも耐える体力もついていましたので、この一大事業に力を注ごうと決意したのです。

最初に私たちが着手したのが、この地域の野草やハーブを食い荒らす野生動物をミリアー帯から遠ざけることでした。つまり、山の尾根伝いに一連の有刺鉄線柵を張り巡らし、野生動物が決して侵入できないようにしたのです。

その後、ミリア・マウンテン・リトリートがここまでになるには、大変長い時間がかかりました。このプロジェクトを始めた1982年当時は、描いた夢は大きくとも、現実にはそれを成し遂げるのに十分な資金さえ手元になかったのです。なので、私たちは手ずから、一つ一つ、一步一步、しかし着実に築いてきたのです。

2番目に取り組んだのが、先述の通り、従来この地にあった「植生」を取り戻すため、播種や植樹を行いました。山に植生が増えることは、この地域の生態系にも良好な働きをもたらしますし、降雨の際も地面に水分を留める保水効果アップにも繋がります。

そして3番目に手掛けたのが、朽ち果てた「古民家の修復・復元」です。村人が最も多かった時期は、15～17家族くらいでしたでしょうか？ なので、60～70人くらいの村人がいたことでしょうか。そういえば、ある歴史資料にミリアのことが書かれてあるのですが、「17人の兵士がいた」との記述もあります。中世期に遡りますが、「1630年にヴェネツィア軍がクレタに来た

時も、既に『ミリア』の集落は存在していた」ことが確認されています。しかし、ミリア集落の起源がいつなのかを語る史料は今日まで見つかってはいません。

ともあれ、石造りの家屋ではありませんが、先祖の代から長年この地を離れていたため、当時の状況は惨憺たるものでした。そうですね、最後の家族がこのミリアの集落を離れたのは、第

2次大戦直後の1947年だったと覚えています。それ以前からこの地を後にする人々が多かったのですが…。殆どすべての家屋が倒壊していたような中で、小さな1件の建物だけが住める状態で残っていました。それはある羊飼いが羊の群れを率いてこの地を通るときに、一宿できるようにと手を入れてくれていたのです。

さて、その重要な「家屋の修復・復元」で私たちが使用した資材は、当時各家屋の周囲に散乱していた元の石材そのものでした。また、あちこちに残っていた家屋の石壁跡から、どのように石材を積み上げていたのか、をあらためて調べていったのです。ちなみに、それらの石材はこの地域の山から切り出されたものですが、鉄分を多く含むために「鉄石」とも呼ばれ、重くてとても固い石です。なので、なかなかめったなことでは割れません。建築資材としては最高のものです。しかしながら、逆にこれで家を建てる場合は「作業」が大変です。これらを再利用しながら、土、砂、石灰を混ぜ合せて漆喰を作り、石材を組み上げていきました³。

また、クレタでも各地域によって家屋の建築形態は異なりますが、私自身「ミリア特有の建築形態」を学ぶために、残っていた家屋の壁に強いて穴をこじ開け、どのような石組にしているかを詳細に調べました。そうすると、「必ず大きな石と小さな石が上下左右、さらには壁の内側と外側で交互に組み合わせられて並べられている」という規則性にも気づきました。ハニアの町の方か



写真4 レストラン、レセプション棟にあるバルコニー。昔ながらの伝統的
石造建築を踏襲し、再生した

調査報告

ら専門の大工に来てもらい、一緒にいろいろと調べたこともありました。殆ど私ともう一人の助手だけでこれらのロッジ（ゲストハウス）を修復・復元していったのです。ある区切りがあったのが1991年ですが、この仕事に取り掛かってから丸9年が経っていました。

初期にはヤコボス・ツルナキスの夢と理想があったわけですが、彼は残念ながら「教員」という職務を持っていたために、週に1回程度しかこの地には来ることができませんでした。それで私は彼と密接に連絡を取り合いながら、作業を進めていったのです。



写真5 ミリアの手前4～5kmは砂利道。これはミリアだけに通じる私道。アクセスは決して良くないが、欧州からの客足は全く絶えない

3. EUによる「地域発展支援プログラム」

ちょうどその年、幸運なことにEUの「地域発展支援プログラム」への申請が承認され、1991～94年の3年間は同プログラムの資金でミリアのプロジェクトを進めることができました。ロッジ（ゲストハウス）も91年までは現在のような良好な状態ではなく、91年以降EUの支援があったからこそ、今のロッジや施設の充実があるのです。すなわち、16件のロッジを作り上げ、先の「有刺鉄線柵」よりはるかに頑丈な防御柵を周囲に設置し、麓の村から自動車でアクセスできるように車道（未だ舗装道路ではないものの）を整備することができました。この資金援助は全費用のほぼ半額までに至ります⁴。

しかし今思い返すと、1982年にこの事業を始めた時点では、確かにヤコボス・ツルナキスが抱いていた「アグリツーリズム・エコツーリズムをこ



写真6 コテッジの1棟

の地で実現しよう！」という理想があるにはありましたが、実にそれは具体的に緻密な計画の基に練られたものではなかったのです。かなりぼんやりとしたものでした。しかし、先述のEUプログラムへ正式申請するに至って、私たちは現地の詳細な「環境調査」を行ったうえで「具体的な目的、完成図、そして収益を上げるビジネスモデル」を作成せねばなりませんでした。そう



写真6 あるコテージの客室内。左には暖炉(本物)の一部も見える

なって初めて、本当の意味でのミリアの青写真が完成したのです。

申請後にはEUの調査団がこの地を訪れ、私たちが過去9年間地道に取り組んできた修復・復元の成果などを視察したのです。その時、彼らは私たちの仕事に大変感銘を受けた様子で、その後、短期間で承認に至りました。

実際には、ミリアは1994年に営業を開始しました。最初は、クレタ島内のギリシャ人観光客が殆どでしたが、1996～97年頃に現在の共同経営者であるタソス（ヤコボス・ツルナキスの娘婿）がこの地に来てくれて、ミリアの経営に携わってくれるようになりました。

4. ミリアにおける私たちの「哲学」、Our Philosophy

そして以下に述べるポイントが、私たちミリア・マウンテン・リトリートのフィロソフィーです。

- ① 「食材」にも「周囲の畑」にも化学薬品、化学肥料等を一切使用しない。
- ② 畑の雑草除去にも化学薬品等は一切使用しない。
- ③ 集落内および周囲の整備には、決してブルドーザーを用いない。
- ④ トラクターなど必要最小限の機械のみで作業を行う。
- ⑤ ロッジおよびレストラン、厨房などすべての建物の石材はミリア現地のももの。また使用木材も現地のもので、製材作業さえも麓の製材所へ依頼するわけではなく、ミリアで手ずからノコギリを使い製材した。

そしてその木材には化学的な腐食防止剤や、照りを出すニスは塗っていない。すべてオリーブオイルのみを塗り込んでいる。他のものは何もない。



写真8 ミリア敷地内の畑の一部

- ⑥ 水道、電気のいわゆる「ライフライン」も麓からは一切引かない。電気はミリア保有の太陽光発電システムを使用するのみ、水は周辺山中の沢からパイプを引き、使用している。
- ⑦ ゲストの食事への食材も極力自前の畑で収穫された有機農産物を提供。2010年頃までは、すべて自前の食材のみでやっていたが、近年はゲストが大幅に増えたので、水不足の問題が顕著になってきた。そのため、ミリア周辺の自前の畑に送る灌漑水を少なくしたことから、食材の供給量が減少。結果、現在は麓のヴラトス村周辺の畑から調達している。ヴラトスの方は、十分な水があり、広い畑も確保可能である。私の兄弟たちが生産者として働き、国から認定される「有機基準」をしっかりと遵守しながら、食材を生産、提供してくれている。
- ⑧ 現在、水については、ゲスト用の水、そして厨房用の水、鶏や牛、馬の家畜用の水などを優先している。近年は、気候の変化からか、降水量は年々減少してきており、それが泉の水量の減少にも影響はしているのではないかと？
- ⑨ ゲストによる「食べ残し」の生ゴミなどは、敷地内で飼育している鶏、牛、馬など家畜の餌としており、無駄のないエコサイクルを保っている。
- ⑩ 現在のロッジ（ゲストハウス）



写真9 敷地内に飼育される家畜(牛)。宿泊の食べ残しは家畜の餌に

は「16件」。しかし、ミリアは将来的にも、ロッジの規模をこれ以上拡大することはない。より拡大すれば、周辺の自然環境に影響は避けられないし、ゲストへのサービスも確実に劣化する。



- ⑪ 「環境を尊重し、且つゲストへのサービスレベルを決して落とさない」そのバランスが最も重要である！ 元来、クレタには巨大ホテルは必要ない。グレードの高い中小規模のホテルが適切な数あればよいと思う。
- ⑫ 例えば、ハニアから西の地域の美しい海岸沿いに、巨大なリゾートホテルが林立しているのは、私に言わせると「大きな間違い」である。
- ⑬ しかし、残念ながらどの国もそうだが、そういう大規模事業に対しては、国も後押しを拒まない。しかし、環境への多大な負荷を考えると、絶対にあるところで「ストップ！」は必要であると私は信じている。然るべき規制が必要である！
- ⑭ 私たちは、これ以上に規模を拡大することはないが、ミリアの「質」を向上させることを考えている。例えば、現在、中世からこの地域で使われている「石の器具」のオープンミュージアムを整備している途中であるが、そういった学びの場や、さらには近くに小さな石造りの円形音楽堂などを手掛けたいとも考えている。
- ⑮ 同様なアグリツーリズム拠点を他地域に展開したいとの希望から、ミリアへ視察に訪れる人々も多い。我々はそれらに対しても積極的に公開し、協力している。ただ、その時に強調するのは「利益を追求してはいけない」、「その地の環境への配慮は最優先である」という2点である。
- ⑯ 一方で、「環境への配慮」ばかりを強調すると、アグリツーリズム施設

写真9 自家製パンを焼く設立者兼オーナーのマクラキス氏

調査報告

の営業さえ控えた方が良い、とも言われる。そのようなロジックではなく、地域住民が生活していくための「一定の収入・利益」を確保しながら、しかし「環境への配慮を怠らない」。そのバランスを考慮し、突き詰めた結果が「持続可能な発展」に他ならない。加えて、そのような中で地域住民が育っていけば、必ずや彼ら自身も将来地域の為に働く人材となってくれるはずである。



写真10 レストランバルコニーでの朝食例(バイク方式)

- ⑰ このような文化、思想、哲学が次の世代の子供たち、若者たちにも教育されるべきだと思う。
- ⑱ 当然、このようなアグリツーリズム拠点がクレタやギリシャ全土にも展開して欲しい。しかし一方で、私自身が長い間忍耐をもって積み上げてきたような努力を好む人々は少ない。この現実は、少々残念なことである。今後、気高い志を抱く若きパイオニアが、次々に出てきてくれることを心から祈っている。

おわりに

筆者は、長年この「ミリア・マウンテン・リトリート」を訪れたい希望を持ち続けていたが、その願いが叶い、且つ専門ゼミの学生たち(当時3年生)と共に2014年9月、調査訪問することができた。そして今年(2016年)の春には彼らは卒業を迎えるが、彼らの殆どが、このエコ&アグリツーリズム施設の運営、ホスピタリティ、そしてフィロソフィーに感銘を受け、各々の卒業論文に何らかの形で取り上げている。各人の中に何か「不滅の印象」が残っている様子だ。

筆者自身、授業や演習において「サステナブル・ツーリズム理論」についても指導してはいるが、理論に終わらず、絶好の実地体験によって彼らが

学び取ることができたことは、指導者としてもこの上ない喜びであった。

また、未だに経済危機という苦難の途にあるギリシャにおいても、ミリア・マウンテン・リトリートの如き「珠玉」のツーリズム施設の存在が、ギリシャの国際観光産業を、より活気づけてくれるようにと祈念している。

ヒアリング実施日：2014年9月5日

場所：ギリシャ クレタ島ハニア県、エコ&アグリツーリズム施設

『ミリア・マウンテン・リトリート』

翻訳者：石本東生

文責：石本東生

[本稿は、奈良県立大学地域創造データベース (<http://npudb.narapu.ac.jp/>)に掲載されている拙論「ギリシャ・クレタ島に息づくサステイナブル・ツーリズムの精神」(2015/4/13登録)に、若干の加筆修正を施し、本研究季報に投稿したものである。]

註

- 1 National Geographic 公式ウェブサイト、http://travel.nationalgeographic.com/travel/best-ecolodges-photos-traveler/#/05-greece-retreat_66864_600x450.jpg (2015年12月5日アクセス、データ取得)
- 2 中世ヴェネツィア時代より繁栄するクレタ島西部の中心都市。ハニア県の県都でもある。
- 3 昔、特に貧困な農家では、漆喰は「土」だけであったが、それであれば壁に雨水がしみこむと「土」が泥となって溶けだし、家屋が倒壊しやすいという危険性があった。
- 4 この支援プログラムは現在の“ESRF” : *European Strategic Reference Framework* 当時の“LEADERS” : *Liaison Entre Actions de Développement de l'Économie Rurale* = *Links between the rural economy and development actions* である。